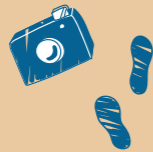


# ぶらり三津浜まち歩き



三津浜暮らしを満喫している岡崎さんと一緒に、古建築や商店街のお店などを巡った数時間。ユニークであたたかな人との出会いに、また訪れたい。 (MAPはP20)



体験した人：武田由梨さん  
2017年に東京から愛媛に移住。上島町でbook cafe okappaを女性2人で営んでいたが、ご主人の転職を機に松山市へ引っ越し。現在は建築設計・監理の仕事をしている。松山での暮らしは1年未満で、現在、市内の一息つける場所を開拓しているところ。

<p>1</p> <p>三津の渡し。渡し舟が港山と往復していて、約2分で対岸に運んでくれる。市道であることに驚く。海風が心地よい。</p>	<p>2</p> <p>港山城跡。静かな竹林の中を歩いていると、まちの喧騒を忘れられる。岡崎さんもよく散歩するようだ。</p>	<p>3</p> <p>竹林を抜けて、山頂広場に到着。忽那諸島や梅津寺エリアが見える。行き交う船を眺めながら、ほっと一息。</p>	<p>4</p> <p>魚屋「丸忠」で今晚の食材を購入。新鮮な魚が安く手に入る。岡崎さんにとってのワクワクスポットなのだそう。</p>	<p>5</p> <p>当時の繁栄を偲ばせる古建築のまち並みを歩く。子規も歩いた風景を思い浮かべると、また違って見えてくる。</p>
<p>10</p> <p>夕食は、昼に購入した魚を炭火で炙る。仕事を終えた武田さんのご主人も合流。心地よさに遅くまで語り合う。</p>	<p>9</p> <p>岡崎さんお勤めの三津浜夕日スポットを案内してもらおう。沈む夕日を前に、写真を撮ったり、二人静かに佇む。</p>	<p>8</p> <p>歩き疲れた後は、ICOI COFFEEで休憩。テイクアウトして、隣の土管のある公園でのおんぶするのもいい。</p>	<p>7</p> <p>商店街には、古くから続く金物屋や惣菜屋がある。さらに移住者による個性的なお店も増えてきている。</p>	<p>6</p> <p>誰が書いたのか気になった「止まれ」の文字。まちのあちこちに発見があり、訪れるたびに新鮮な気持ちに。</p>



左が家主の岡崎麻祐子さん、中央が宿泊者の武田由梨さん。右の三振を弾いているのは武田さんのご主人で、朝ごはんを食べて出勤だ。

## 歴史ある「旧鈴木邸」で三津浜暮らしを味わう

瀬戸内海に臨み、港町として栄えた松山市三津浜に佇む「旧鈴木邸」。明治後期の建築当時の面影を蘇らせた空間は、どことなくあたたかい。その姿を残せたのは、まちを想い活動してきた人々と、受け継いだ岡崎麻祐子さんの存在が欠かせない。ここで暮らす魅力を伝える岡崎さんの取り組みを体験し、三津浜に通い続けて住むまでの話を聞いた。



旧鈴木邸を訪れた武田由梨さん。家主の岡崎麻祐子さんの案内で、まずは三津浜を歩いてみた。

「お店の人とお喋りしながら、地元のお醤油や魚など、日用品が買えるといいですね。カフェでは地元の人やお客さんとも一体になって話せて、そうした三津浜のフランクさが楽しいです」

三津浜の暮らしに興味がある武田さんにとって、ローカルな人や物に触れる案内は満足のようだ。身近な自然も好印象。

「船で渡って港山城跡に行ったのは予想外の展開。土に触れながら、自分よりも背の高い緑に囲まれるのが好きなので、こういう自然溢れるお散歩コースが近くにあることに驚きました。三津浜で暮らす良いイメージにつながりましたね」

途中で物件の内覧会に遭遇し、「ご好意で見学させてもらう。歩けば、そんな何らかのハプニングに出会えるのまちを「日々の生活が映画のよう」と岡崎さんは語る。「マイペースでやりたいことをして、自分らしく暮らせるまち」とも。だから、ほっとできるお店が多いのかもしれない。

### 古建築を生きた場所に

武田さんが宿泊する旧鈴木邸は、明治後期の建物で、材や意匠のこだわり、当時の風流な人々の暮らしを見ることができ、不思議な縁で、岡崎さんが受け継ぐことになった。

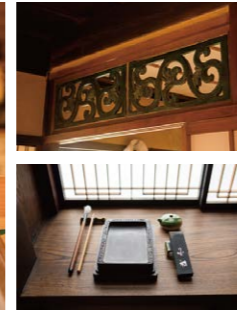
そもそも岡崎さんが古民家に魅了されたきっかけは、鯛メシ屋「鯛しだつた」。文化財の建築で、古いままの空間が生き場所として使われていることに衝撃を受け、その後、取り憑かれたように三津浜に通い続けた。ちょうどその頃、古民家「木村邸」の活用が模索されており、「何かあったら責任を持つからやってみたら」と、管理人をしていた商店街のイタリアンレストラン「フロア」店主に背中を押され、その運営に携わることになった。

そんな折、旧鈴木邸が壊されるかもしれない噂を耳にする。三津浜煉瓦工場で焼いた陶製の欄間や茶室が印象的で、三津浜の景観上、重要と感じていた建物を何とか残したいと働きかけていたら、2年後にやっと家主と話ができた。木村邸での活動実績、そして三津浜の歴史と文化を繋げたい想いが伝わり、その場で「買わないか」という話になる。岡崎さんの返事は、「明日、銀行に相談に行ってください」。即決だった。

住み始めた当時は、新建材でリフォームされた部分もあり、昔の建築の価値を再生させる改修に着手する。「無謀だとあつて、気が付いたんですよ。でもその頃、三津浜の古民家に魅力を感じた地域内外の人たちと、講演会や保存活動などを行って、それが古民家改修を助成する制度につながった。そのおかげですね」と、三津浜を想う人々の気運の高まりがあり、今の姿に至ったことを振り返る。



2階でくつろぐ武田さん。「ここでは本や紙を相手にして過ごしたい。そう、日記や手紙を書くのもいいですね。スマホを置いて、ゆっくり、自分に集中できます」



写真右より、(上) 三津浜煉瓦工場で作られた珍しい陶器の欄間。旧鈴木邸は煉瓦工場の社長であった鈴木重義氏の住居でもあったという歴史を持つ。(下) 書道教室も開かれている。/ 投函した手紙が、時間をかけて届く「かたつむりPOST」。未来の自分に手紙を書いてみては。/ 2階の書斎。以前の住人の蔵書が残されている。/ 古道具が空間と調和しているエントランス。物販やトークのイベントを開くことも。オリジナルポストカードを販売している。



旧鈴木邸  
愛媛県松山市三津1丁目3-13  
<https://9suzukitei.amebaownd.com>  
※宿泊予約や見学、まち歩き相談は、HPをご覧ください。

暮らしを五感で感じる

伝統構法に精通した設計者や、職人が腕を振るい、ボランティアの力も借りて、当時の面影を偲ぶ空間が蘇った。障子越しの光の美しさ、夜の静けさ、庭の四季の移ろい。日々、そこで暮らす発見を誰よりも感じているのは岡崎さんだ。その魅力を伝えるために、2020年より民泊を始めた。「住みながら残すために、生業としてどう成り立たせるのか。悩みながらですね」と試行錯誤を打ち明ける。

その空間に身を置いた武田さん。「欄間とか、細部の意匠は確かに素敵だけれど、この場所は空間と岡崎さんの魅力だと思ふ。心地良さを届けられる空間って何だろうと浸りたくりますね」と自身の設計の仕事にも考えを巡らす。

三津浜のまちと建物に加えて、岡崎さんの暮らしを味わえる旧鈴木邸。訪れる人と作る、ここだけの体験が待っている。



縁側に腰掛けて、茶室に続く庭を眺める。庭の木々や草花は、移りゆく季節の訪れを教えてくれる。雨の日の敷石が濡れた風情も美しい。